

原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追求、特集号
第五十九号

原告団レポート

CO患者——
清水正重さん



妻の栄子さんは、病院に夫の清水正重さんを見舞つては、どれほど人間回復に心を砕いてきたことか。でも、変型してしまった夫の人間はもどつてくれなかった。

とある日

これは福岡市の箱崎にある、九州大学医学部付属病院内科病棟四階の廊下の一角。ベンチに腰かけながら、男の人が無心に「ハモニカを吹いていた。

そんな彼を取り巻いて、十人ほどの男女が廊下に立ったりベンチに腰かけたりして、彼に優しいまなざしを集中していた。

この秋、青空がからりと晴れあがったとある日のこと、実は「ハモニカを吹いている人は、三池のCO患者の一人——、国から長期傷病給付を受けながら、この病院に入院、いまも治療をつづけている清水正重さん(五十一歳)だった。

そして彼のまわりを囲みながら優しいまなざしを集めているのは、三池から見舞いにやってきた

三池労働員やCO患者なにか、その毒症の症状は非情過ぎる。それにその家族だったのである。

まさに廃人

述べるまでもなく清水さんもまた、ちょうど十二年前の昭和三十

八年十一月九日、三池鉱で起きたあの炭じん大爆発のとき被災した患者で、重症の方だ。

三池労働調査団の報告書はCO中毒症について述べている。CO中毒はCOが、赤血球

の中の血色素と結びついて、酸素と血色素の結合を邪魔する。酸素と血色素の結合を邪魔する。酸素と血色素の結合を邪魔する。

たばこの煙を主な発病原因として、中枢神経のどこかで、音楽だけに起きるもので、全身の臓器、細胞

胸に響け人間の叫び

ひとたび変形してしまった人間はもどらない

音だけに生き残った機能

が供給されることを必要とする大脳と、その他の中枢神経である。脳と、その他の中枢神経である。脳と、その他の中枢神経である。

外泊のため帰ってこなかった夫のため、荒尾市万田社西町四棟の住まい(三井鉱山鉱員住宅)に、せまいながらも内部を美しく装飾

してフロアをこしらえた。ひとりの息子の祐輔さんが成長して家をでてしまうと、これまでのように夫正重さんを杜宅の共同フロにつれていく者がいなくな

ったからだ。彼は自宅に帰ると、妻の栄子さんからそのフロに入れてもらう。裸になるや否や、彼は小さな浴槽

にザブッと飛び込み、あがつて体を洗う段になると、こんどはあたりかまわず石鹸の泡を飛び散らす。大学付属病院の大きなフロ場

もちろん、文字など書けるはずがない。それどころか、用紙に三つか四つした点と点との間を線で結ぶことさえできず、食事をするとおかしな顔をした血なまぐさい口もとがなかった。

傷痕の深さ

清水正重さんは、もちろんこんな人ではなかった。三池闘争を通じて進んで来た民主家庭以前とは違い、しきりに「シ」ではさむと

全ては音で

そんな彼は、一切のことが音でしか判別できない。食事と水をえはんとおかしな顔を食卓にならべてやっても、「ハイ、これがごは

ん」「ハイ、ここの方がおかず」と、食卓をポンポンとたたいておかしな顔をしながら、そうして

を別々に食ってしまうのだ。妻の栄子さんは、ときおり試験前にならべられたものが口に入れ

るべきたべものだと判断がつく。すべてがこうだ。第一、彼は妻の栄子さんが

どんなに自分のかたわらに寄り添っていても、ひとこと声をかけてもらわないと、その人

が自分にとって妻というかけがえのない存在に結ばれている人

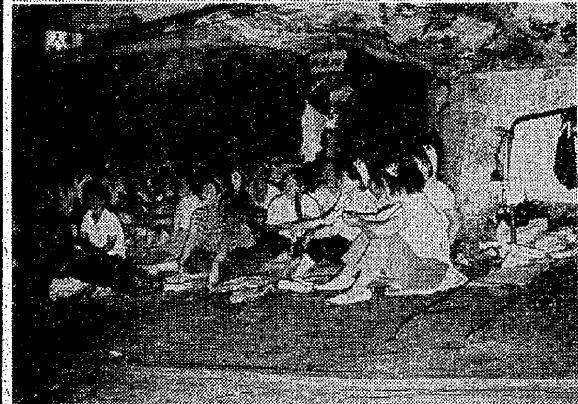
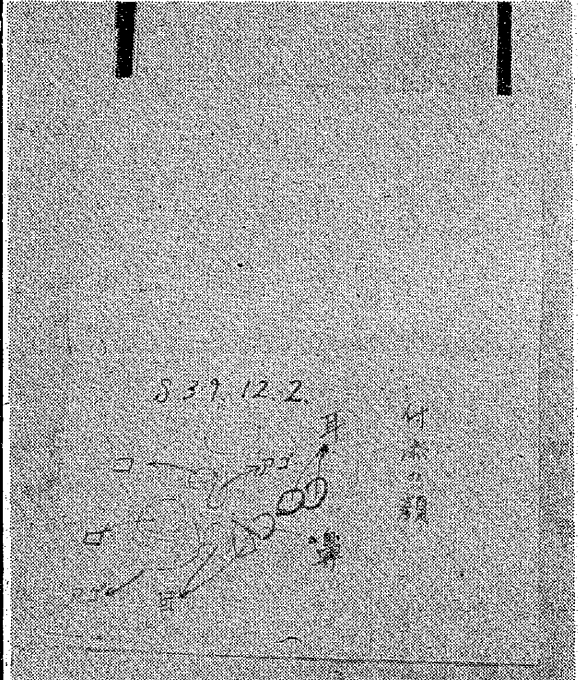
とわからない。あの日以来十二年間、廃人となってしまった自分を

いたわりつつは、はげまし、泣きつづけてきてくれた、それがわが妻の顔だというのが、

「病院に見舞いにでかいます折



上は、清水さんがかつて膨つた表札や、指輪など。下は、その清水さん描く付添さんの顔。



CO立法を要求しての、坑底座りこみ。栄子さんもこのなかにいてがんばった。